

「中国から日本を見る」

——東アジアの中の日本と中国——

野村浩一

久しぶりに皆さんに会えてたいへんうれしく思っています。在学生の方もいらっしやるかもしれませんが、OBの諸君が主体だと思います。皆さんも卒業後それぞれの道を歩んでおられるわけですが、実はきょうの話に直接の関係があるものですから、最初に私の現状報告を少し詳しく申し上げることから始めたいと思います。

一九九五年ですからもう五年前になりますが、立教大学を退職いたしましたして専修大学の法学部に移りました。場所は九段でしたから、池袋は通勤の途上なので、私は何かにつけて立教へ顔を出すだろうと思っていたのですが、いろいろ忙しくて全く来るチャンスがなく、学部と同僚の先生方ともほとんど会わないままにこの五年間を過ごしてきました。

北京日本学研究中心で

ところで、専修大学で三年ほど勤めましたところ、北京日本学研究中心の日本側主任教授として赴任して欲しいといふかなり強い依頼を受けました。それでいろいろ考えた末、二年前の春、一九九八年にそちらへまいりまし

た。こんなわけで、今は北京で生活しています。今回、ぜひというお話を受けたものですから色々無理もあり、準備も不十分だったのですけれども、昨日こちらへ戻りまして、明日また北京に帰ることになっています。

したがって立教の法学部を辞めた後もやはりずっと教育に従事していたことは確かですけれども、先ずは現在の仕事について少しお話ししたうえで本題に入りたいと思います。

北京日本学研究中心は、北京外国語大学のなかにあります。この組織は日本の文部省に当たる中国の教育部と、日本の外務省の外郭団体、国際交流基金との共同事業ということで設立され運営されている日本学研究所の人文系、修士課程の大学院です。そういう点では、日中合作事業みたいな形になっているセンターでありまして、一九八五年、一五年ぐらい前に創立された、いわゆるジャパノロジー研究の大学院と違ってよいでしょう。

私はそういう教育機関があることは知っていましたし、友人で四カ月ほど派遣教員として講義してきた、あるいは一年間主任教授を務めたという人も周りにいましたので、やはり意義のある仕事と考えまして、お引き受けしたわけです。

日本学研究中心ですから、当然、教えることは日本学、日本のことです。もっとも皆さん御承知のように私自身はいわゆる日本研究者ではなく中国研究者です。なぜ私が、ということになるのですけれども、日本から来る先生方は、年二期制として一学期一〇人ほど、日本文学、日本語学、日本社会学などが専門の、主として大学の先生方が赴任してきます。この方たちは日本のことを教えるわけですから、基本的には中国事情とか中国の問題とは直接の関係をおもちではありません。

しかし、この組織自体は中国の組織であって、北京外大の学長が最高責任者で、センターの主任も中国の先生です。私は日本側の主任教授で、合作ということになっている。つまり、この組織を運営していくためにはどうしても日中間の接触とかりエゾンの役割を果す部分が必要になってきます。だとすると、やはり日本人のなかで中国関

係をやっている人のほうがいいだろうということ——これまでもだいたいそうだったのですけれども、こんなわけで、その職に就いていると考えていただければ、おおむねご理解いただけると思います。

そういう意味では、よその国で文字どおり「仕事」をするつもりで行きました。私自身、今までも外国経験がないわけではないのですが、大学の先生の場合、ふつう留学といえますと、こんなことを言うとは叱られるかも知れませんが、さし当り自分の研究が主ですからわりと自由また楽かも知れません。しかし、今度は向こうで行政あるいは運営をやることになってしまいました。私、わりと一生懸命やっていたものですから、ものすごく忙しくていささかくたびれたというところです。

実は、今回、講演を依頼されたときも、吉岡先生からお話があったのですけれども、三月から学期が始まるものですから、とても行けないと申し上げました。吉岡先生が何とかならないかと、また連絡してこられたので、「何ともならない」と申し上げたのですが、そこはまことに日本的で、「そこを何とか」と言われてしまったから（笑）、これはもう仕方がない、一日だけ帰ろうとなりました。

### センターの運営と仕事

元に戻って大学院の修士課程ですが、一学年二〇人の学生をとります。四コースに分かれています。日本側の派遣の先生は完全に日本語で講義をします。入学試験がありますけれども、全国の大学の日本語科を卒業した語学的には非常に優秀な学生が入ってくる。学生は一年半ほど勉強したうえで、半年間、論文作成のために日本へ留学しまして、日本語で論文を書いて、帰国後、論文提出、口頭試問を日本語で受けて、修士号を得る。得た後はだいたい日本研究関係あるいは日本語の先生になる。あるいはさらにドクターに進む人もあるという組織です。

ですから、考えてみるとなかなかユニークな組織には違いない。しかし、そのなかでやはりいろいろな問題にぶ

つかること多いわけです。正直のところ、最初の二、三カ月は、ここはいつたいどういいうところで、自分は何をするのだろうかときすがにかなり苦労したという感じがあります。

中国側の主任はとていい方ですし、日本にも留学した方で、向こうのスタッフは日本語がとてよくできるのですが、しかし、さまざまな中国側との折衝の中で喰いちがいもないわけではない。それに派遣されてきた先生はそれぞれ日本学の専攻で一国一城の主です。その世話や意思統一、また東京の国際交流基金本部との連絡、折衝など。それから私はそこまで想像力が働かなかったのですが、大学院ということになると、やはり入学試験から、カリキュラム、卒業判定まで、どんなに人数が少なくても一通りの仕事は必ずあるわけです。行って最初にカリキュラム改革をやったりして、立教でもだいぶやったのですけれども、ああ、ここでもやることになったと思っていくらか閉口したし、入学試験とか面接とか、それはそれなりに、こうした面でも直接に中国人学生に接して貴重な経験ではあったのですけれど、ともかくこういうことで仕事の内容はだいたいご想像いただけたと思います。

さて、そういう次第で、ここ二年ほどどっぷりこういう生活に漬かっておりまして、日々いろいろな問題が起こるものですから非常に忙しくしていたうえに、何よりも頭の構造、思考の回路がどうもそちらをめぐって回転するようになっていて、実はきっちりした学問的な、また分析的な講演をする準備がありません。予告では「学問と政治」という大テーマだったのですが、そこまではとても十分な余裕がありません。

しかし振り返ってみますと、私の置かれている状況は多少特異な面があるようにも思います。最近では観光旅行をする人も山のようにいるわけですし、企業に勤めている人もたくさん中国に長期滞在されています。それから、研究者の場合はやはり一般的には研究調査、資料の収集、学会出席といったことになる。こういう点からすると、何か少し違った側面、違った次元で中国に触れている部分もあるような気がします。

また、私はいちおう近代中国の研究者ですから、中国のそういう方面の先生方と接触をしたり、もう少し広くい

えば、主として北京ですが、北京のいわゆる知識人がだいたいどんなことを考え、どんな雰囲気の中にいるのかについて、それなりの経験を積んだということもあります。前おきがだいぶ長くなりましたが、今日はそうしたことを生かしながら、自分の感じていることのいくつかを紹介するという形でお話を進めたいと思います。

### 「日本を見る」ことと「中国を見る」こと

そこで、いちおう「中国から日本を見る」という題にしたのですが、常識的にいえば、外国にいて日本を見たらどう見えるかということ、よく言われる表題です。その程度にお考えいただいて十分なのですが、ただ、一言で適切に表現することはむづかしいのですけれど、もちろん私は日本人ですから、本当は、私は先ずは日本人として中国を見る、あるいは経験するということがあるわけです。その点からいうと、実はこの題の裏側には「日本から中国を見る」という逆の面も非常にはっきりと貼りついているともいえる。そして、そのうえで、中国の人はこのように日本を見るのだなと理解できる部分も出てくるわけです。

ただ、そのように考えますと、この問題は実は非常に扱いにくい問題です。さし当りは、私という一人の人間の感想とか感じということになりますし、もう少し突っ込んでいくと、日本人的な感情や意識、そして先ほどの池田さんのお話ではありませんが、非常に広く文化という問題にも関係することになるかと思えます。ですから、たいへん整理がしにくいテーマです。もう一つ、つけ加えてお断りしておきたいのですけれども、きょうは結論が全くないので、矛盾したことを言う部分もあるかもしれません。別の言い方で私の気持を表現しますと、たとえば改革開放時代の中国の社会変容などといった、まとまった題を立ててお話しすることも、全く不可能というわけではな

いのですが、今日はそうした分析的知識の伝達よりは、むしろ実感や経験に即して、たいへん判り易い形で素材をそのまま提示してみたい、そしてまた何かの機会に色々考えていただきたい、そういう講演もまた、このような機

会では意味があるのではないかと考えて、お話しする次第です。

ほんの少しだけいくらか学問的な文脈で敷衍しておきますと、有名なタルコット・パーソンズの構造—機能分析の應用ではありませんが、やはりある一つの社会システムを構成するのは政治の分野、経済の分野、あるいは社会の分野、文化の分野といったふうに分けられ、それぞれがたいへん関係していると思います。政治や経済の分野でこれをきちんと扱い、報告するのは、制度の問題もあるのでわりとやりやすいのですが、文化や意識、価値観の問題は必ずしもそうではない。しかし、同時にそれが非常に強い相互影響作用を持っていることもたいへん確かだと私は思います。そういうことをかなり強く意識しながらお話ししてみたいと思うわけです。

### 歴史のなかの日本と中国

さて、そうした観点から二つばかり問題を扱ってみたいと思いますが、最初に考えてみたいのは、見出しをつけるとすれば「歴史のなかの日本と中国」ということになろうかと思えます。しかし、この問題について、大上段にふりかぶった報告をするというつもりはありません。きょうは自分の経験、思いに即してお話しします。

私はいちおう運営面の責任者ではあるのですが、主任教授は講義を一つ持ちます。それは「日中比較文学文化研究」という題がついていて、まあ何を話してもいいわけです。そこで、事前の準備として近代日本の中国認識あるいは中国観という題で話すことにしようと思いました。同時に、私は中国のことを勉強してまいりましたので、近代中国の日本認識あるいは日本観を比較、相互対照することは意味があるだろうと考えました。

私、そういう題の本も書いておりました、たまたまその本が向こうで翻訳されたりしたものですから、それやってみたわけですが、私がそこでまとめた内容を一口でまとめてみますと、私は戦後、中国研究を始めた者として、当然、それ以前のつまり戦前の研究を踏まえて出発するわけです。戦前の日本には中国研究のさまざまな蓄積

があります。しかし、一言でいいますと、近代日本の歴史の大きい流れ、日清、日露から、さらに満州事変、日中戦争、そして第二次大戦の敗戦という中国侵略の歴史を考える時、その中でそれらは中国の奥深い動向、底流に対する認識あるいは見方については多くの欠落部分があったと言えると思います。

したがって、私は戦前の研究の中でそれぞれの時代がどういう点を見落としてきたのだろうか、あるいは逆に比較的豊かな洞察を示したのは、どのような認識であったのか。そしてそれをもたらしたものは何だったのだろうかといったことを主として問題にして、そういう面での考察を加え、本の内容もそういうもので一貫していました。もちろんそうはいってもどんな場合でも、人々はいちおうそれぞれそれぞれの時代を精一杯生きているわけです。自分もその時代に生きていたら同じことをたぶん考えたろうと思ってしまうこともたくさんありました。

非常に具体的にいいますと、大陸浪人の代表のようにいわれますけれども、孫文の革命運動を献身的に援助した宮崎滔天、あるいは一般的に超国家主義者とよばれる北一輝、それから大正デモクラシーで非常に有名な吉野作造などを扱ったりして、最初の学期は話を進めました。

ところが、自分でもうまく整理、表現できないのですけれども、実は大変正直のところ、そういう形でやっていて、何となく気持のうえで落ちつかない部分がありました。

歴史事実にいいますと、当時の中国は清朝末期から中華民国にかけて、甚だ分裂、混乱していました。日本から見たらそのように見えるというのも全く事実なのですが、そういう中から中国でどのような社会的動態の下に再生、再統一する動きが出てきたか。そうした流れをどのように見通すか。問題はそこにかかっていたと思います。吉野作造さんなどは、やはり群を抜いた認識を示されていた。しかし中国側から見れば、吉野さんにしてもやはりたいへん欠落があると見える部分も多々ある。他方、一般的には黒竜会の内田良平など、いわば戦前の右翼の代表ですが、中国を見て完全に奇形国であると断言し、前途に未来はないと言っている。

そういうことでいちおう日本の問題を話すのですが、もちろん聴いているのは中国の若い学生です。同時に日本学をやるとういう人たちですから、こうした問題について、歴史的な事実としてよく理解しますし、学習もする。そこで何かたいへん議論が起ころうということでは必ずしもありません。しかし、御承知のとおり、かつての日本の中国に対する蔑視観という問題、アジアに対する問題など、とりわけ戦前はそういうことがきわめて強かった、そして何よりも明確な中国侵略という事実があります。そういう話を聴いて、やはりあまりおもしろくないということとは確かだと思います。というよりも、話していても自分としてそういう感じになつてくるわけです。私は、同時に中国の近代日本観も並行して話をして、できるだけ学術的な形で問題を展開しているのですが、私自身が何か落ちつかないという感じを強く持ちました。

それはなぜだろうかということを少し考えました。別に私はナショナリストではありませんから、特に日本がというつもりもないけれども、しかし、日本には日本の事情があるという気持ちはやはりないわけではない。よく考えてみますと、近代の錯綜した問題については日本と中国というようにだけ問題を立てますと、歴史事実上の様々のファクターを考えた場合でも、それを解きほぐすための出口がなくなる部分がある。それからまた、先にも話しましたように、自分が日本人として考えてきたこと、そういう立場から立ててきた問題をここで提示、プレゼンテーションしてみても、やはり意味が違うし、問題も違うのではないかと気づきました。

それで考えた末、その次の学期からは、戦前の日中間の基本問題を充分に把握しつつ、しかし両国の関係をより広い歴史的状況のなかでとらえることによって、むしろその中で比較したほうがいいだろうと考えました。そこで、次の学期からは世界史のなかの近代日本と近代中国という場の設定をしようと考え、近代日本と近代中国という問題をより広い、より開かれた場でとらえてみることにいたしました。その後はだいたいそういう形でいくつかなの問題を展開してみたわけです。一般に、日中関係史とよばれる分野があります。非常に通りのいい、わかりやす



い名前で、ただちに理解可能なのですけれども、やはりその背後にある非常な広がりをとらえつつ、どんな問題でも、できるだけ深く扱っていかねばならない。私、いま開かれた場、などと言いましたが、あとでもふれますように、これはやはりたいへん重要な問題だろうと思っています。さて、近代世界全体の問題となると、余りにも当然のことですが、ヨーロッパとアジアといった大問題が出てまいります。

そうになると、近代ヨーロッパや資本主義の問題、あるいはウェーバー的な問題にもなりますので、私としては多少蘊蓄を傾けて、その後さまざま問題を、不十分ですけども、展開してみたということになると思います。

その過程でかえって日本のことを勉強することになって、夏や冬の休みにはぶらぶらするどころではなく、日本から本を取り寄せてたいへん忙しかったのですが、日本社会あるいは近代以前にさかのぼった日本の歴史のことを考えて自分なりにさまざまの発見がありました。とりわけ中国と日本を比べて、全く中国にない問題として、日本の武家社会の問題があります。これは封建制の問題にも関係するでしょう。今まで山のような研究がありますけれども、そうしたことを自分としてどのように理解し、位置づけるかという問題、これは今後の課題ということになります。

### 日中関係の歴史感覚

ともあれ、日本は古代中国文化の圧倒的な影響を受けながら、同時に、やはり日本なりの特有の社会をつくってきた。中国文化の強い影響を受けていますが、それをてこにしながら、そしてそれに対していわば突っ張るような形で、自分の個性をさまざまの分野で形成してきた、そして、それが行なわれそれを規定してきた場合は、何よりも東アジアという「政治、文明世界」である、私は勉強の過程でそういう感想あるいは意見をかなり強く持ちました。今後いろいろ考えてみたい問題です。

ところで、古代から近世に至る日中関係を中国の人は、現在をも含めて、どう見ているかといいますが、これまで指摘されてきていますが、やはり非常に強く、中国は本家、本流である、日本はそういう点からいうと、やはり末流ということになる、そういう意識は非常に強烈です。だから、儒教などについても、儒教が日本にどのように伝わったか、どのように変容したかというのが、主たる研究になる。日本の方からいっても、日本の儒学は中国の儒学を非常によく勉強してやってきましたから、当然といえば当然という面もあるのですが、これは中国にとって潜在的に存在する非常に強い意識だと思います。

どの民族でもどうも潜在的無意識部分というものがあるようです。もちろんこれは歴史的に形成された問題ですが、いま言ったような部分は比較してみると、たいへん強く表れる側面だと思います。私から見ると、中国の人が日本を研究する場合、本家、末流という文脈で、そしてそれが研究ということになっているのは、そういう民族意識の部分、潜在的な意識が存在していて、そしてそれはヘーゲル哲学ふうの表現でいうと、大変即自的な意識だという気がします。こういうことはお互いの問題ではありますけれども、そういう点を一つ実感として強く感じさせられました。

もう少し具体的にわかりやすい形でいいますと、少し話が飛ぶかもしれませんが、中国で日本のことを呼ぶ場合、シャオリベン「小日本」という言い方があります。これはいくらか揶揄的で、ちよつとからかった部分だと思えます。やはり多少は蔑称と言えるかもしれません。公開の場ですから中国の留学生の方がいらつしやるかもしれません。どうぞ開かれた意識で聴いていただきたいと思いますが、たとえば、授業中話をしていて「皆さんご承知のように日本は小日本シャオリベンですから」と言うと、みんながどつと笑うわけです。

それはそれでいいのですが、あるとき、ある人に真顔で次のように聞かれて非常にびっくりしました。それは「日本人は小日本と言われて、すごく憤慨するか、非常に軽蔑されたと思うか」というわけです。このなかにもそ

う言われてけしからんと思う方もいらっしゃるかもしれません。また、戦前の日本はたしかに小日本から大日本帝國へと歩みを歩もうとしましたが、私個人からいうと、日本が島国であつて、小国であるというのは余りにも自明の事実であつて、別にそう侮辱された感じが無い。それぞれにお考えいただければいいのですが、そんなふうにはあまり思わないわけです。思わないから、言葉としてもあまり何とも思わない。地理的にもむろん大国ではありませんし、資源も乏しいということをやつてきた。

それから大変大事なことですけれども、思想的にいいにしても、近代日本において小日本主義というのは、大正時代、石橋湛山などがはつきり主張したことですし、遡れば内村鑑三さんの『デンマルク国の話』などいろいろあつて、そういうことのなかにむしろ積極的な価値を認めるといふ考えが、一つの流れとして明白に存在します。そして、現在でもそれはあきらかに生きている。

ですから、私はもちろん全くそうは思っていないと返事をしたのですが、やはり中国の人は潜在的にそういう気持ちがあるのかなと考えました。これは先ほど申し上げた、ある、やや即自的な意識の部分ですね。一般に中華思想ということがよく言われて、何かというと中華思想と言われてしまうけれども、これはもつともつときちんと歴史的に分析しなければならぬ問題です。外からと中国世界の内部からの両方からの分析が必要だと思ひます。しかし、ともあれ大国という意識はやはり強いと思ひました。これはいい悪いというより、事実の問題としてあるわけです。

こういう形でいろいろお話ししますと、こうした事例を通じてかえつて考えていただける部分が多いはずですが、他方、日本側が古来、中国に対してどのよう思つてきたか。これは、最近もさまざま研究がありますので、古代から近世という時期については省略してここでは近代の問題に一言触れたいと思ひます。

## 近代におけるねじれ

さて一九四五年までの時代ですが、実はこの時期についてあらためて展開すべきことはあまり多くはありません。私は、日清戦争以降、日本が大陸侵外型軍事国家になったというのは、歴史的に見て間違いのないところだろうと思います。それはたいへんはっきりした事実です。きわめて一般的な表現をとると、脱亜入欧、富国強兵の道を歩んだということでしょう。脱亜入欧という言葉が歴史的思想的にもつ非常に複雑微妙な問題はともかくとして、その時期に立ち遅れた中国、あるいは中国蔑視観が生まれたことは、改めて指摘することもないと私は思います。戦後、日本が基本的にはそういう歴史のなかからそれを反省しつつ、新たな出発をしたというのもしかだと思いません。

ところでそのように考えたうえで、二〇世紀初頭の日中両国のいろいろな関係は、かなりいい時代もなくはなかった。中国から非常に多くの留学生が日本へやって来た時代がある。官民を問わずやって来て、ある種の連帯的な基盤もなくなかった。これは一九〇〇年から一九一〇年ぐらいの間で、最近では、アメリカ人の研究者が、近代日本のなかで日中両国のこの時期はゴールデン・デイケード、黄金の十年とまで言っています。私はちよつと言い過ぎではないかと思うけれども、そういう時期もあつたわけです。

しかしそれにもかかわらず歴史的、政治的にはともかく、文化とか意識という面にまで下って考えてみると、本当は非常に複雑です。最近、ある文章を読んでいまして、これは完全にインテリ層を代表するエッセイですが、ああ、そうかと、今度は逆に私がほとんど意識していなかったことに気づかされたことがあります。それは日清戦争のころ、日本の勝利について日本でそれを歌う歌集が出版された。これは『大東軍歌』という書名なのですが(一八九五)、それを現在の中国の女性研究者が読んでのエッセイなのです。

ところで、実はこの歌集のなかに漢詩がある。日本の歌といえば和歌、俳句といったことになりましたが、漢詩も

また非常にはつきりした一つのジャンルを形成して、ずっと日本文学史のなかにあります。明治時代まで漢詩の流れは非常に明白でしたし、漱石などを含めてずっとそうした教養の中にいるわけです。私はその歌集を読んだら、そのなかに漢詩があることを全く不思議に思わなかったらうと思えますが、その問題を取り上げてエッセイが書かれています。

たとえば、歌集の中にはこんな一句がある。すなわち「ひとたび戦って旅順を抜き、再び戦って盛京を屠らん」といった句です。盛京は北京です。そして作者はこういう感想を抱くのです。つまり「詩の中では一再ならず盛京を屠る」といった残酷な言葉を使っており、これからしても日本軍が戦うごとに住民を皆殺しにして中国を征服しようとしていたことがわかる」。ここには実は漢詩あるいは漢字がもつ特有の微妙な問題がありますが、考えてみれば、漢詩はもちろん完全に中国のものであります。そしていま一つ、そこでは日本人も中国の故事来歴みたいなものを非常に使いながら、戦争に勝利した、あるいは「敵をやっつけた」という漢詩を詠んでいるわけです。そしてむしろ、この場合それがただちに強い印象あるいは感情として読者にやって来る。中国の古典を使いつつそういう漢詩が書かれていることに対して、何とも言えない感情、——そこにはもちろんはげしい憤懣の感情も含まれるわけですが——そうした複雑な感情をもって受けとめられる。

近代になると、かつての日中の文化交流や経済関係が急にねじれる部分がある。とりわけ意識や文化、感情の面で急速にねじれる部分があって、それが二〇世紀を通じて非常なトラウマといえますか、やはりある傷痕を残すという部分があると思います。

戦前の日本と中国の関係を、もし歴史学の中で、それも政治史や経済関係の次元で分析すれば、日本帝国主義の問題、軍国主義やその社会形態その他いろいろ分析は可能です。今までもたくさん行われていますが、しかし日中間の関係が歴史的、文化的に深いだけ、意識や感情の面で何か非常に表現し難いねじれが起こった。それは二〇世

紀全体を通じてあり、また、将来のことは二一世紀の問題ですが、現在に至るまである痕跡を残しているというのが私の実感です。

ただ、これは完全にインテリレベルの問題と言っている。中国には膨大な大衆がいます。知識人の役割も非常に大きいけれども、多くの人がそういう問題まで考えているというわけではない。しかし、そうした部分がやはり存在するだろう。潜在的な無意識と言いましたが、これは歴史的に由来する潜在的な無意識と違っていいかも知れません。そういう部分の問題をやはり感じさせられました。それは文字どおり広い意味での文化や意識にかかわる問題です。

### 戦後の諸問題―パブリック・メモリー―

近代のことを話せば山のようにありますが、大まかに戦後というか、今の話に移りたいと思います。戦後といってもすでに五〇年たっていて、一つの歴史としてはつきりあるわけです。戦後日本の歩みも中国に伝わっていますし、また中国も文化大革命やそれ以降の問題などさまざまあって、たいへん難しいところがたくさんありますが、一九七二年、日中の国交が回復いたしました。それまでに二十数年かかっている。一九七二年から現在まで約三〇年ということになります。

私個人について見ますと、国交回復まではもちろん中国のことを研究するのは様々な面で非常に難しい部分がありましたし、留学をしたり、見に行くわけにもまいりません。大陸との間では法的には戦争状態が終わっていないわけですから、依然として敵国関係にあるということになる。たいへん困難だったのですけれども、一九七二年には国交が回復され、それから七八年には日中間に平和友好条約も結ばれました。

七二年に国交が正常化したときは、私自身は何か非常にさっぱりした、暗雲が一挙に晴れたという気がしました

が、やはりそう単純ではないということも確かで、それはその後の歴史を通じてはつきりしてきたと言えると思います。

国交回復は戦後日本の画期でもありましたが、一言でいうと、国交の回復と並んで国民的理解といいましょうか、和解とまではなかなか至らない。理解ということ自体もすごく難しいという気がいたします。ただし、これは一般論としていえば、むしろ、日本と中国だけの問題ではありません。いま国際化ということが言われますが、完全な理解など当然あり得ません。また国家的利益という部分も国際政治の面で強く存在する。私はそれほどアンリアリスティックではありませんし、それにどんな民族もそれぞれ個性を持っていますから、完全な理解とか和解などはない。むしろ個性がもつと強く出るだろうと思います。しかし、それを前提としたうえで、なおいくつか自分の経験めいたものに少しだけ触れておきたいと思います。

こうしたことはたくさん伝えられていますけれども、中国の一般の人にとって、やはり戦後の日本の経済成長と経済大国というのは、たいへん驚異です。一般の人の代表としていえば、タクシートの運転手さんとの会話ということにもなりますが、日本の製品等を含め、ふつうの人はやはり電気製品や車の性能には非常に感心していて、たとえば「トヨタの乗用車は日本円でどれぐらいするか、そうか、人民元にするとかこれぐらいか、とても手が出ないな」などと言う。それはもう非常にはつきりしている。

そして知的なレベルでいえば、なぜそうなったか、あるいは戦後の日本の経済成長の秘密は何か、もつと知りたい。一九八〇年代以降、中国ではそういう研究もたくさん出ています。これは日本に対する知的な興味であり、知的評価だと思います。

もつともごく最近はまだバブルの崩壊、アジアの経済危機、日本の社会問題などいろいろあります。具体的に、若いセンターの学生でそのような問題を知的関心、研究の対象としたい、日本経済、日本社会のさまざまな分

析をしつかりやりたいという学問的関心が、非常にはつきりとあると言えます。

しかし、先ほど申し上げた意識とか気持ちという次元の問題になりますと、さまざまな問題が残っている。いちばんはつきりしていることは、これは日本の政治的対応とも深く関連していますが、南京大虐殺の問題、戦争責任の問題など、やはり広く存在しているわけです。

私の経験からいいますと、一年ほど前だったか、西南地方で改革、開放ではまだ立ち遅れたところですが、貴陽にある貴州大学で話を頼まれました。そのときは研究レベルでの講演という前提で、議論、討論もしたいと現代日本の中国研究という題で話しました。そのとき語学は十分自信がなかったので、通訳を頼みました。八〇人から一〇〇人ぐらい、学部の学生諸君もいましたが、やはりいくつかの質問が出て、そのうち一人が非常にはつきり戦争責任の問題と、もう一つ「日本人は非常に残虐であると聞いているがどう思うか」と聞いてきて、私はさすがに立ち往生いたしました。

説明したいことはたくさんある。いくら何でも本性残虐ということではないので、歴史的、政治的な問題を精一杯話しました。しかし、到底理解されたとは思われない。

これは一方では確かに中国における教育の問題もあります。戦前の日本、日中戦争の問題があり、そして抗日戦争の勝利、国共内戦の中から戦後の中国、あるいは現在の中華人民共和国ができてきたというのは確かです。から、教科書など見ますと、特にアヘン戦争以降の歴史はものすごく詳しい。二一箇条要求などの問題も、日本の学生と同じかそれ以上に詳しく教えられている。そして現在の中国の愛国主義教育の問題は確かにあると思います。

しかし私が考えるのは、やはりメモリーという問題です。最近、私自身パブリックメモリーという形でいろいろ問題を考えることがとても多い。中国でもおそらく親などから伝承される部分が大きく存在していると思う。そう



いう問題を考えますと、この場合、何となく国民感情と言ってしまおうと少し単純過ぎます。プライベートな記憶とすることもむろんありますが、パブリックメモリーというものもやはり深くあるだろうということに気づきます。そういうメモリーがあるうえで日本の政治家がときどき、そして繰り返し失言をするということが起こります。これを中国の公的メディアが取り扱うときはたいへん政治的になる。それはたしかなのですが、しかし私たちとしては何かそれに呼應する、そのメモリーの部分を見落としてはいけないと強く感じます。

なお、それとも関連する戦争責任の問題とか戦後補償の問題とかいうことになりますと、実に様々の議論があり、また非常に深く考えねばならない性格の問題です。今日は、自分の考えをのべる十分な余裕がありませんので、今回は、中国にリアルに存在するある部分を紹介し、やはりわれわれは、未来のためにもそうした部分に向き合っていかなければならないだろうというにとどめたいと思います。

さて、少し問題を変えてしまおうことになりますが、もしパブリックメモリーというなら、考えてみたら、もちろん日本には日本のそういうメモリーがやはりあるわけです。戦後日本の問題としていえば、対米の問題だって、対中国の問題だってあります。また、戦後思想の問題としてもそれにかかわる部分が存在しています。そして、そういうところから、最近では皆さんもご承知のように、日本では歴史観の問題として自由主義史観、自虐史観批判といった言葉がいろいろ乱舞している。国民の物語という言い方もあるようです。少し離れたところから見てみると、一切の説明を抜きにやや象徴的な言葉でいえば、どうも日本国はともすると自閉症を起こす国だなという感じを持ちます。

これだけ言ってしまうと少し不公平です。せっかくしばらく日本と中国の間のようなところにいますので、そういう目で見たら、中国という国はたいへんいろいろな要素を含み込み、また大国であり、長い歴史を持っています。ですから、日本が自閉症を起こすとしたら、中国という国は自家中毒を起こす国のようにもみえる。これは比

喩的にしか言えません。客観的に分析せよと言われたら、中国の人とも議論しなくてはいけないと思いますが、何か感じとしてそうかと思つていただければ、たぶん当たる部分があるのではないかと思ひます。

### 開かれた地域主義、開かれた意識

もう結論にしたいと思ひます。そんなことをいろいろ考えたうえで今後、二一世紀、あるいはグローバリゼーションということを考えますと、たいへん一般的な言葉ですが、東アジアの日本と中国でいえば、最近私はわりと一般的な言葉として、開かれた地域主義という言葉に大きい意味をこめたいと思つています。日本と中国は今後も東アジアという同じ地域に属する国として密接な関係をお互いに続けることになる。そういう地域を構成したうえで、日中関係が外へとお互いに開かれる。あるいは開いていくような形で未来を展望していかなければならない。そういう段階にいつそう差しかかっているのではないかと思ひます。

そのように考えると、もちろん韓国、朝鮮の問題なども出てくるわけで、それをむろん視野に入れなければならぬ。さらにはアジア、ヨーロッパ、問題はたくさん出てくるわけですが、私はこれを国際政治の問題として言っているのではなく、やはり意識、文化の側面できりわけ問題にしたいと思つています。開かれた意識の必要性は、両方に当てはまる問題としてとても必要だろうと思ひます。

きょうは全く触れませんでした。中国は全体として、疑いもなく、最も広い意味でのいわゆる近代化の道を急速に歩んでいると私は考えます。それはまず経済の分野に起こり、社会のあり方に衝撃を及ぼし、さらに文化とか意識の領域にも衝撃を及ぼし、それがまた反作用として社会、究極的には政治の領域にも衝撃を及ぼしていくと思ひます。非常にわかりやすいのは政治の問題で、一党独裁の問題、政治の民主化、党の腐敗などいろいろ論ぜられますけれども、私は意識とか文化の面も中期、長期展望ということを考えてたいへん重要だろうと思ひますの

で、その一つの限られた問題を取り上げた次第です。

開かれた意識、意識を開くという問題は、思想的、哲学的に考えると、およそどの時代、どこでも必要な普遍的な命題ともいえるでしょう。思想的、哲学的には非常に普遍的な命題ですが、きょうのテーマに即していえば、共通の地域に属する日中両国が安定的な関係を造りながら、その関係そのものが外へと開かれた地域主義という方向へ進むことがぜひ必要だろうと感じています。

少し端折りましたので、つながらない部分が多々あったと思います。そして、十分な整理がつかない問題でしたけれども、もっぱら実感に即して話してみました。多少とも皆さんの参考になればたいへん幸いだと思ひながら、以上でお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)